

2010年度 私立大学図書館協会東地区部会研修分科会
第4回 情報リテラシー教育 (2010.10.1, 早稲田大学図書館)

FD活動と協働できる 情報リテラシー教育を考える - 真の学習支援を構築するために -

同志社大学企画部企画室・企画課長
社会学部嘱託講師「学術情報利用教育論」

井上真琴

minoue@mail.doshisha.ac.jp

▶ 1

まとめ

図書館が実施する情報リテラシー教育は高等教育の「質の向上」に寄与できる。そのためには、

1. FD活動と高等教育改革の文脈のなかで情報リテラシー教育を捉えることを意識する。
2. 「人はどう学ぶのか」=学習理論に立脚しながら、プログラムの企画・運営を行う。
3. 情報源サービスから「学びの体験」サービス(学修支援)への転換を理解する。

▶ 2

目次

- I .情報リテラシー教育のこれまでとこれから
- II . 学習支援の根拠と背景を知る
- III . ブレークスルーはどこにあるのか:
特にFD活動との接点

▶ 3

- I .情報リテラシー教育のこれまでとこれから

▶ 4

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

大学図書館政策の流れ

- ▶「大学図書館機能の強化・高度化の推進について(報告)」(学術審議会、1993)
※学習活動の場としての図書館
- ▶「大学図書館における電子図書館機能の充実・強化について(建議)」(学術審議会、1996)
※図書館の協力のもとに情報リテラシー教育
- ▶「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」(科学技術・学術審議会、2006)

▶ 5

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

情報リテラシー教育の研究と運営の指針

野末俊彦. 研究文献レビュー:情報リテラシー教育:図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向. カレントアウェアネス. 2009, No.302. <http://current.ndl.go.jp/ca1703>, (参照 2010-09-26)

日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ガイドライン合冊版:図書館における情報リテラシー支援サービスのために. 日本図書館協会, 2001, 81p., ISBN: 4820401157

※自学の教育方針に応じて参照する

▶ 6

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

学術情報リテラシー教育のいろいろ

平成19年度 大学図書館職員研修(短期)「学術情報リテラシー教育入門」資料より引用

図書館の局地戦

京都大学 全学共通科目「情報探索入門」
東北大学 全学教育科目「大学生のための情報検索術」
※テキスト出版あり

杏林大学医学図書館の事例
(平成19年度学術情報リテラシー教育担当者研修資料)
※コースにもとづく企画作り

三重大学 CMSの"moodle"を活用した例
慶應義塾大学 KITIE.PATH

私立大学図書館協会 「パスファインダーバンク」
千葉大学 授業資料ナビゲーター Path Finder

「図書館ハンドブック」第6版利用教育より作成

▶ 7

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

全国大学での実施状況

◎情報リテラシー教育の有無 73.4%あり

1. 正課授業 : ※教員と図書館員の関わり方
 - 1)「科目関連型」:一部に図書館が協力
 - 2)「科目統合型」:全部に図書館が協力
 - 3)「独立型」:"情報リテラシー"に特化した科目に協力
2. 課外講習 : 図書館実施の情報リテラシー教育
 - 1)「図書館オリエンテーション」
 - 2)「データベース利用教育」
 - 3)「教育支援・レポート作成支援」

参考:筑波大学編,『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書』, 2007.3
<http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/pdf/future-library.pdf>
(参照日2010-09-26)

▶ 8

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

情報の「偏在」から「遍在」へ

9

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

情報環境の変化と情報リテラシー

情報探索の「多様な方法」「多様なソース」「多様なチャンネル」
図書館は、数ある情報探索・収集のチャンネルの1つでしかない。

方法やソース、チャンネルの交通整理
適切な評価と使い分け

「資料の提供」から「探索の考え方」の提供へ

10

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

野末先生の言説《情報を主体的に使いこなす力》

(特に図書館・図書館情報学でいう)情報リテラシーとは、情報の探索・収集に関わるスキルが中心となっている(と思われる)。しかし、情報リテラシーは、入手した文献などを読解・分析し、その成果を表現・伝達していく一連の過程にわたるものであり、単なる機器操作にとどまるものでもない(ととらえたい)。まさに、「情報」を活用して、さまざまな「問題」を解決していくための総合的力である(と捉えたい)。

野末俊比古。「情報リテラシー教育」とは何かを考えるにあたって、情報管理. 2009, vol.52, no.3, p168-171.

11

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

情報リテラシーの能力基準

- 1) 必要な情報の範囲を決定し、
- 2) その情報に効果的にかつ効率的にアクセスし、
- 3) 情報とその典拠を批判的に評価し、
- 4) 選択した情報をその人の知識ベースに組み入れ、
- 5) 特定の目的を遂行するために効果的に利用し、
- 6) その情報利用を取り巻く経済的、法的、社会的問題を理解したうえで、倫理的、合法的に利用する

Association of College and Research Libraries,
Information Literacy Competency Standards for Higher Education(2000)

12

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

情報リテラシーの定義

情報リテラシーを持っている人は、つまるところ、**学習の方法を知っている人である**。学習の方法を知っているのは、情報がどのように構造化されているか、情報をどのように見つけるか、どのように利用すれば他人が自分の成果を摂取して学んでくれるかを知っている。

また、どのような作業や判断においても必要な情報を見つけることができるので、生涯を通じて学んでいく。

※[Knowing how to learn](#)
 ※[Learning how to learn](#)

ALA, *Presidential Committee on Information Literacy*,
 ▶ 13 *Final Report (1989)*

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

同志社大学図書館での経緯

同志社大学教育開発センター・2007/12/3 教育効果向上部会メモ

実施年代	実施プログラム	対象者	評価
2000年頃まで	新入生向けガイダンス	新入生(両校地)	・京田辺と今出川(夜間主)の新入生に開催。
2001年頃	新入生向けガイダンス + 各種データベース講習会	全学生	・DBベンダーからの講師派遣。個別データベースから総合的な探索法の支援が課題となる。
2006年度	初年次教育との連携を意識 情報探索技術の体系化 入門編:「 役立つ図書館活用術 」 初級編:「 雑誌記事・論文の探し方 」 中級編:「 レポート・テーマ探索の術 」 上級編:「 レファレンスサービスで対応 」	全学生	・体系化してスキルを俯瞰 ・外部委託可能なプログラムのプロトタイプ作成
2007年度	トライアルの実施 プログラムの調整	全学生	・基本プログラムの試行

▶ 14

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

2008年度 全国図書館大会 第2分科会
同志社大学の報告よりスライド借用

講習会プログラム「情報探索の技」の体系

	企画・構成 仕様確定	講師	
入門・初級(4コース) 役立つ図書館活用術	図書館スタッフ (初年次教育コースと連動)	委託	
初級編(4コース) 30分でわかる	図書館スタッフ	図書館スタッフ	
初級編 読んでみよう!	図書館スタッフ	図書館スタッフ	
中級編(3コース) 90分でパッチリ	図書館スタッフ	図書館スタッフ	
中級編(5コース) プロが教える	委託	委託	

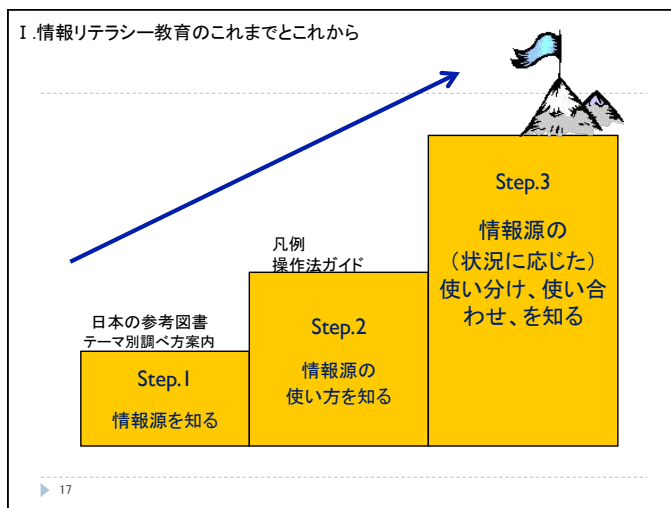
▶ 15

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

焦点をどこにおくか?

スキルの種別	印刷体資料	電子化資料 (データベース/フリーサイト)
1.情報源を知る (何があるのか)	・『日本の参考図書』等のガイドブック ・各種主題別紹介資料 ・書誌・目録	・OPACの存在 ・ポータル参照 ・パスファインダー参照
2.情報源の使い方を知る (どう使うのか)	・凡例読解 ・編集方針/編集形態	・検索方法/検索スキル ・インデクシング方法 ・各種演算子
3.総合化した情報源利用 (なぜ使うのか、どう組み合わせるのか)	調べ方の「考え方」：メタ思考 ↑ 行為のなかの省察: 調べながら考え、考えながら調べる	

▶ 16



I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

課題1：情報リテラシー教育を 学習支援の視点から捉える

○コンピュータ利用、情報探索・情報検索に関わるスキル
 情報を入手するには、入手するためのツール(道具)をよく知り、その使い方を学ぶことである。

↓

○ツールのスキルから学習スキル/アカデミックスキルへ
 上記に加え、入手した情報・資料を読み解き分析して、具体的な知的成果物を創造するプロセス全体に亘るもの(=問題解決能力)をプログラム化

▶ 18

I.情報リテラシー教育のこれまでとこれから

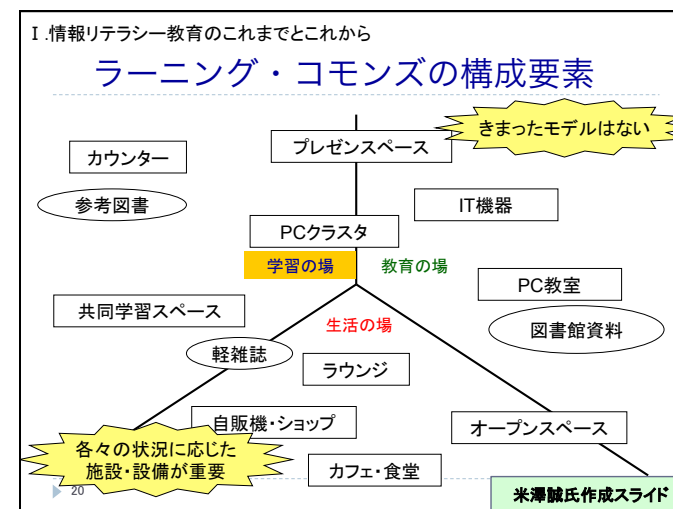
課題2：情報リテラシーを獲得できる 学習環境を提供する

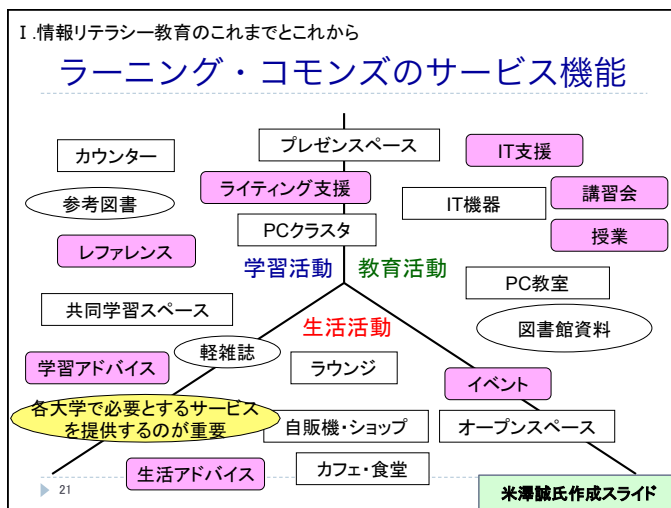
話題の《ラーニング・コモンズ》

- ・創造的空間として物理環境
- ・学習の文脈に応じた人的支援

参照：井上真琴、「学びのマネジメント」を支援する。IDE. 2009, No.510), p.11-15 2009/5

▶ 19





II. 学習支援の根拠と背景を知る

22

II. 学習支援の根拠と背景を知る

高等教育界からの注目

No. 510
学習環境としての大学図書館
2009年5月号

- ◆天野郁夫「考えさせられることの多い特集であった」 (『内外教育』No.5933)
- ◆井下 理「教授法改善と学習支援型図書館」 「国際水準での大学の学習環境整備」 (『教育学術新聞』2010.1.3)
- ◆大学改革フォーラム in 東海 「大学の学習支援における図書館の可能性」 (2010.3.13)
- 高等教育の改善 (FD) の視点で注目を浴びている
 - ×入館者減少の食い止め策
 - ×空いた場所の有効活用

23

II. 学習支援の根拠と背景を知る

私立大学情報教育協会も特集

私立大学情報教育協会機関誌
『大学教育と情報』
特集 「図書館による学習支援力」
(2009年度 Vol.18 No.4 (通巻129号))

図書館の学習支援のこれから 牛崎 進
 図書館の学習支援機能強化 ～明治大学の読書ノート機能の公開～
 図書館でラーニングサポート ～立教大学～
 図書館による学習支援セミナー ～学習院大学～
 アカデミック・スキル修得のために ～法政大学～
 学習支援機能の基盤形成をめざして ～創価大学～
 学生へのきめの細かな学習支援をめざして ～神奈川大学～

24

II. 学習支援の根拠と背景を知る

ゆきづまりと喫緊の課題

◎教育との結びつきの希薄さ

- ▶ 効果がきわめて限定的
- ▶ 教育手法の問題／情報リテラシーを備えるべき、主体的な問題解決型の学習がない。
- ▶ 図書館がどのように、学生の学習成果の実現に寄与できるのか。

文科省ヒアリングでの永田治樹先生のご指摘(2005.2.15)
 「II. 学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」
 (科学技術・学術審議会 2006.3)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingijijyutu4/toushin/06041015/011.htm

※教育理論・学習理論を知る必要あり(How do students learn?)
 ※「学びの身体技法」獲得の支援(Learn "how to learn")

▶ 25

II. 学習支援の根拠と背景を知る

教育から学習支援へ

教育コンセプトのパラダイム転換

「知識の伝授」(授業)

↓

学習者自らの「創造性開発」(学習支援)

※教育(=授業)と学習支援が対等な関係

▶ 26

II. 学習支援の根拠と背景を知る

学習中心の教育コンセプト

大学教育概念の変化

『大学改革2010年への戦略』p.138より転載

▶ 27

II. 学習支援の根拠と背景を知る

学習支援にシフトした背景

- ▶ 高等教育のグローバル化
 高等教育の国際通用性(教育の質保証)
 Learning Outcomes重視:「～ができるようになる」
- ▶ 高等教育のユニバーサル化
 全入化と18歳人口の減少(進学率56.8%)
- ▶ 社会の情報化:知識基盤社会
 知識の伝授よりも知識の探索と創造

▶ 28

II. 学習支援の根拠と背景を知る

押えておくべき「答申」類

- ▶ 2008年12月24日
学士課程教育の構築に向けて(答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
(参照2010-09-25)
- ▶ 2005年2月1日
我が国の高等教育の将来像(答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/010.htm (参照2010-09-25)
- ▶ 1998年10月26日
21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm
(参照2010-09-25)

▶ 29

II. 学習支援の根拠と背景を知る

例えば、単位の実質化(1)

単位: Credit(信用!)

1単位の授業科目は、標準的に15時間の授業と30時間の準備学習や復習の時間を合わせて45時間の学修を要する教育内容をもって構成されている。

大学評価・学位授与機構
『高等教育に関する質保証関係用語集』
http://www.niad.ac.jp/n_shuppan/package/no9_21_niadue_glossary_2009.pdf

※文部科学省の「大学証明」での不安(詐欺の片棒を担ぐ?)

▶ 30

II. 学習支援の根拠と背景を知る

例えば、単位の実質化(2)

- 現在の単位制度は、教室における授業と事前・事後の準備学習・復習を合わせて単位を授与するものであり、学生の自主的な学習が求められる。このため、教室における授業だけでなく、授業の前提として読んでおくべき文献を指示するなど学生が事前に行う準備学習・復習についても指示を与えることが教員の務めである。
- 教室外における学習を徹底させ、学生が主体的な学習に十分取り込むことができるようにするためには、指導を担当する個々の教員の努力に加え、図書館の座席数や必読図書の所要冊数の確保、開館時間や開館日、貸出機間など施設・整備利用の面を含め、学生が学習する場として大学の学習環境の整備にもこれまで以上に留意する必要がある。

「21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)」

▶ 31

II. 学習支援の根拠と背景を知る

例えば、単位の実質化(3)

- 教育課程編成・実施の方針に基づき、学生を本気で学ばせること、単位制度を実質化させることは、「入難出易」と形容されてきた我が国の大学にとって、これまでも大きな課題であった。
- 我が国の単位制度は、授業時間外に必要な学修等を考慮して45時間相当の学修量をもって1単位と定めており、制度上要請される学習時間については、諸外国に比して低いわけではない。問題は、それが実質を伴うものであるかどうかである。
- 学生の学習時間は、「学習成果」の達成度にも密接に関連してくるものと推認される。単位制度の実質化の必要性は、これまでも指摘され、改善策が提言されてきた。

▶ 32

「学士課程教育の構築に向けて(答申)」

II. 学習支援の根拠と背景を知る

新しい教育手法の登場

学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法(アクティブ・ラーニング)を重視し,例えば,学生参加型授業,協調・協同学習,課題解決・探求学習,PBL(Problem/Project Based Learning)などを取り入れる。大学の実情に応じ,社会奉仕体験活動,サービス・ラーニング,フィールドワーク,インターンシップ,海外体験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施する。学外の体験活動についても,教育の質を確保するよう,大学の責任の下で実施する。

「学士課程教育の構築に向けて(答申)」

▶ 33

III. ブレークスルーはどこにあるのか:
特にFD活動との接点

▶ 34

III. ブレークスルーはどこにあるのか

FD活動の活発化と研修内容

FD(ファカルティ・ディベロプメント) = 教員の組織的な教育力向上に向けた持続的な活動

- ▶ わかりやすいシラバスの書き方
- ▶ 授業デザインを学ぶ
- ▶ 授業アンケートのフィードバック方法
- ▶ クリッカーを利用した効果的な授業実践
- ▶ PBL,TBLの授業(ファシリテーション)方法
- ▶ 学生のやる気をださせる話し方講座
- ▶ よい学習行動を導く「課題の与え方」

▶ 35

III. ブレークスルーはどこにあるのか

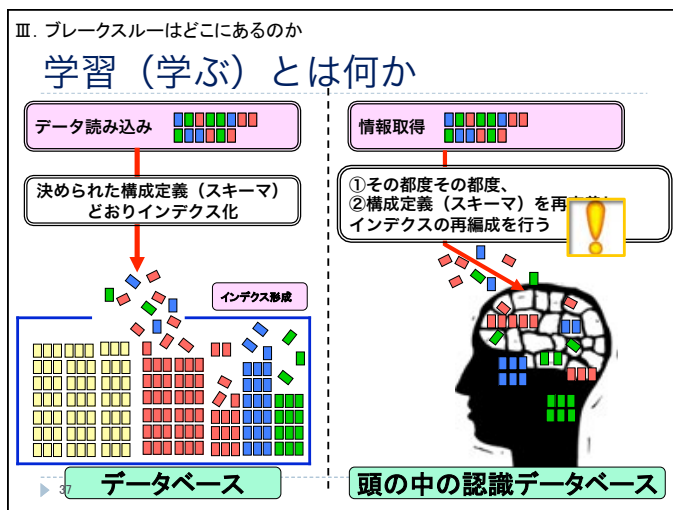
学習(学ぶ)とは何か

- ▶ 日々得る情報を批判的に摂取し、新しい知識を創るために、頭の中の思考のスキーマ、インデックスを更新し、知識を再定義・再構成するプロセスそのもの。



Fabulous!!

エルゼビアサイエンス ライブラリ・コネクトセミナー
▶ 「情報リテラシー教育」(2009. 12)



Ⅲ. ブレークスルーはどこにあるのか

欧米と日本の情報リテラシー教育の違い

学習支援に必要な能力

1. 支援するひとが、インストラクショナル・デザインと学習環境理論を知っている。
2. 教授法・教育手法を理解している。
3. 学習理論「人はどう学ぶのか」を学んでいる。
※アンカードインストラクション、ジグソーメソッドほか

上記のことに基づいた設計と運営

大学コンソーシアム京都主催
SDフォーラム(10月17日・キャンパスプラザ京都)
テーマ:「協働」から生まれる職員の能力開発

《分科会A》
教職協働の基礎としてのインストラクショナルデザイン
報告者: 鈴木 克明 氏 (熊本大学 大学院社会文化科学研究科 教授システム学専攻)

内容の専門家である大学教員と協働するためには大学職員は教育方法についての専門性を持たなければならない。
すべての教育内容に使える科学的な教育方法「インストラクショナルデザイン」の基礎を解説する。

→ 図書館員のためのインストラクショナルデザイン
→ 図書館員のための教授法・教育学入門

Ⅲ. ブレークスルーはどこにあるのか

発想の転換が必要なのでは？

情報源提供サービス
+
多様な学びの体験サービス

“知の身体技法”の獲得支援

図書館は提供する「モノ」よりも
そこで起こる出来事「コト」を重視したい

III. ブレークスルーはどこにあるのか

教員との対話で明らかになってくること

- ◎同志社大学教育開発センター(教育効果向上部会)
- ▶ 1年次図書館ガイダンス等の開催「量」は認知されている。
しかし、3年次以降の教育課程に効力なし。
→プログラム内容の質の向上
→学部カリキュラムの編成に問題ありと教員が自認
 - ▶ 講習会案内は2-3月,科目シラバスは12月に記述。
有意義な組み込みができない。
→リテラシー教育プログラム体系の提示
→コンサルテーションの実施
政策学部・文化情報学部の全クラスに導入検討中
(カリキュラム担当者が動く)

▶ 41

III. ブレークスルーはどこにあるのか

今後のプログラム開発と運営の焦点

- ▶ 実際の問題解決の文脈に埋め込んだ情報リテラシー教育プログラムの開発・実施へ
Course-Related Approachが可能な領域(初年次教育など)
Active Learningが意識されている領域(PBL科目など)
- ▶ 情報探索作業や論文作成作業の全プロセスを含んだ、学生とゴール達成を共有する運営体制
- ▶ 図書館活用を組み込んだ教育改善(FD活動)の提案ができる能力を
図書館の役割を理解し教育に組み込んでくれる教員づくり。
FDのアプローチを取り入れた支援を実施。

井上真琴. FDとの接点から図書館を視る. 丸善ライブラリーニュース. 2009, no.7-8, p12-13. http://www.maruzen.co.jp/business/edu/lib_news/baacknumber20091110.html(参照2010-09-26)